

発掘された今治の戦災

【展示期間 令和5年4月22日(土)～8月27日(日)】 改訂版

今治市教育委員会 生涯学習課

はじめに

78年前の昭和20(1945)年、今治市は3度にわたるアメリカ軍の空襲を受けました。1回目は4月26日、2回目は5月8日で、共に通常爆弾つうじょうぼくだんを用いた爆撃でした。8月5日から6日にかけて行われた3回目の空襲では多量の焼夷弾しょういだんのほかに消火活動を妨害するための破砕爆弾はさいぼくだんや通常爆弾も投下されました。これらの空襲で551人の尊い命が失われ、建物地域の76%が焼失しました。

戦後復興の中で戦災を伝える痕跡は姿を消していきましたが、市内で行われた発掘調査では投下された焼夷弾の実物や戦災ガレキなどが見つかっています。今回の展示では、発掘などで見つかった戦災関連資料を取り上げます。

大浜防空壕の内部

戦時中は各所に防空壕が作られ、空襲警報が発令されると市民はその中に隠れました。

今治の戦災と関連遺跡の位置



アメリカ軍は、1945（昭和20）年8月6日の空襲ではあらかじめ設定された爆撃中心点を狙うように焼夷弾を投下しました。

爆撃中心点の周囲に描かれた半径が4,000フィート（約1.2km）の確率誤差円は、投下した焼夷弾の半数が着弾すると見込まれていた範囲です。

記録されている焼失範囲や出土した焼夷弾からは、確率誤差円内外の着弾状況が推測できます。

凡例

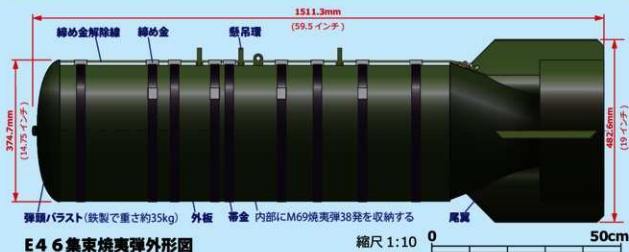
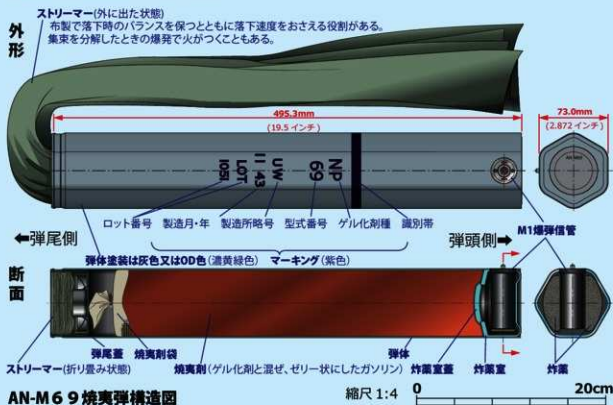
- 1 別宮上河内遺跡（集束焼夷弾部品出土）
- 2 高地栗谷1号墳（焼夷弾出土）
- 3 南日吉高塚遺跡（焼夷弾出土）
- 4 平成24年度公共事業試験掘6地点
- 5 大浜防空壕

- 4月26日空襲の概略被弾範囲
- 5月8日空襲の概略被弾範囲
- 8月6日空襲の主な焼失範囲

0 縮尺 1:25,000 2,000m

今治に投下された焼夷弾

8月6日の空襲で多量に使用されたのは「AN-M69」と呼ばれる焼夷弾^{しょういだん}です。これは、六角筒状の鉄製弾体^{だんたい}の中にガソリンを主成分とする焼夷剤^{しょういざい}を充填したもので、主に日本家屋向けに開発されました。これを38発束ねたものが「E46」と呼ばれる集束焼夷弾^{しゅうそくしょういだん}です。E46はB29から投下されると、後部に取り付けられた信管^{しんかん}があらかじめ設定された時間で起爆して集束を解除し、M69焼夷弾を空中で放出します。M69焼夷弾は、地面に着弾すると弾頭に内蔵された信管が発火し、さらに数秒後に火薬が爆発して火のついた焼夷剤を噴出しました。今治市ではE46が2,449発(M69換算で93,062発)投下され、場所によっては1㎡あたり3発の密度でM69焼夷弾が着弾したとされています。



出土した焼夷弾

1 別宮上河内遺跡（べっくかみこうちいせき）

別宮町9丁目にある弥生時代後期・古墳時代・中世の遺跡で、平成8（1996）年に行われた発掘調査の際、E46 集束焼夷弾の頭部に取り付けられていた「弾頭パラスト」が1点出土しました。鉄製で直径約37cm、重さは約35kgあります。



E46弾頭パラスト前面



同後面

2 高地栗谷1号墳（こうちくりたにいちごうふん）

高地町1丁目にあった6世紀の前方後円墳です。平成15（2003）年に行われた発掘調査の際、M69 焼夷弾2発が墳丘に刺さった状態で出土しました。1発は発火済みでしたが、もう1発は内部に黄色物質が見られ、不発弾の可能性があると報告されています。M69 焼夷弾は信管の構造上不発弾が発生しやすいものでした。



M69 焼夷弾出土状況

3 南日吉高堤遺跡（みなみひよしたかつつみいせき）

南日吉町1丁目にある中世の遺跡です。平成27（2015）年に行われた発掘調査の際、M69 焼夷弾2発が包含層の中に刺さった状態で出土しました。いずれも発火済みと見られ、弾頭部分のみ残っています。全体が激しく錆びているものの、一部の破片には灰色の塗料が残っています。M69 焼夷弾の弾体は1mm程度の厚さの鉄板でできていますが、信管を装着してある弾頭は厚く作られているため比較的残りやすい部分です。



M69 焼夷弾出土状況（赤丸の中）



M69 焼夷弾弾頭部

出土した戦災ガレキ

今治市教育委員会では、学校統廃合による新校舎建設に先立ち、平成 24 (2012) 年に現在の吹揚小学校の敷地内で遺跡の有無を確認する^{しくつちようさ}試掘調査を行いました(公共事業試掘 6 地点)。

調査の結果、4 か所掘削したトレンチ(試掘坑)^{しくつこう}から遺跡は見つかりませんが、焼土や炭、陶器類を多量に含む戦災ガレキの厚い層が確認できました。

昭和 20(1945)年 8 月 6 日の空襲の前後に撮影された^{ていさつ}偵察写真や、戦後まもなく吹揚公園(今治城跡)から撮影された写真を見ると、調査地点には宅地と耕作地がありました^{なら}が、建物は全て焼失していることが分かります。戦後復興の際に戦災ガレキをその場で均したり敷地の低い部分に^{はいせ}廃棄したりしたと考えられます。

第3トレンチで遺構土の下から確認された戦災ガレキ層。明赤褐色の焼土で、厚さは約70cmあります。空襲時この位置に建物はなかったことから、戦後周辺のがレキを廃棄したものと考えられます。



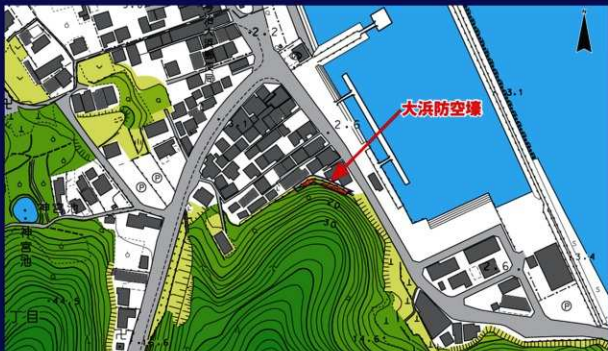
第4トレンチで遺構土の下から確認された戦災ガレキ層。赤褐色で炭・レンガ・陶器を大量に含み、厚さは約35cmあります。この付近にあつて焼失した建物に伴うガレキと考えられます。



大浜防空壕

太平洋戦争中、空襲の被害を避けるため各所に民間の防空壕ぼうくうごうが作られていました。令和4(2022)年、大浜1丁目で行われた急傾斜地崩壊対策工事の際、9基の防空壕が見つかり、今治市教育委員会では埋め戻し前に測量調査を行いました。

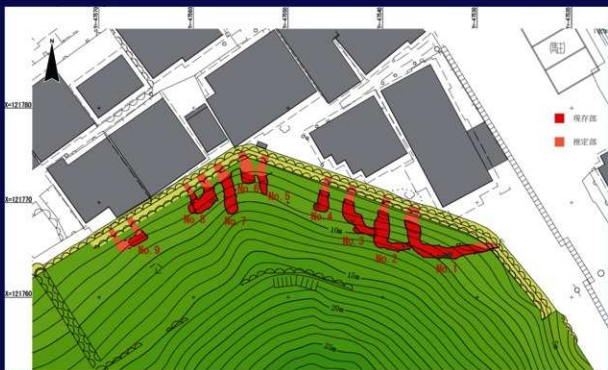
防空壕は、民家の裏に接する山の岩盤を掘り込んであり、子供も構築を手伝ったという話があります。入口は昭和20年代に作られた石垣でふさがれていました。平面形状はL字状、コの字状、直線状の3種類が見られ、壁に腰掛けこしめを設けたものや天井を支えていた坑木の柱穴こうぼくが残っているものがありました。



大浜防空壕位置図

縮尺 1:2,500

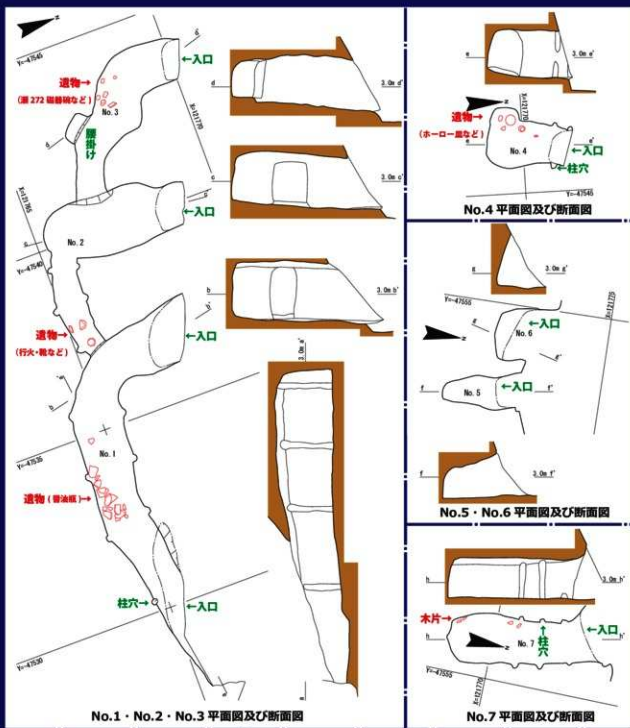
0 100m



大浜防空壕遺構配置図

縮尺 1:400

0 20m





防空壕 No.1~4の入口(東から)



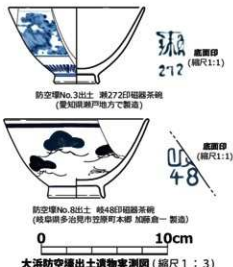
防空壕 No.4の内部と遺物(北東から)



防空壕 No.8の腰掛け(北から)



防空壕 No.1・2の内部と遺物(西から)



大浜防空壕出土遺物実測図 (縮尺1:3)

防空壕内部からは陶磁器や金属・ガラス製品などの遺物が採取されました。中でも、底面に「製
 造者標示記号(統制番号)」と呼ばれる記号が記された「統制陶器」が注目されます。これは昭和
 15(1940)年から21(1946)年頃にかけて用いられた記号で、物資統制のため陶磁器の生産品目や
 生産量に制限をかける目的で各地の製造業者に付けられていました。愛媛県では砥部焼で記号が
 付けられた業者があります。中には、どこの業者が製造したか史料で分かるものもあります。防
 空壕 No.3 から見つかった「瀬 272」の茶碗は、愛知県瀬戸地域で製造されたもので製造業者名は
 不明ですが、防空壕 No.8 の奥壁付近から見つかった「岐 48」の茶碗は、岐阜県多治見市の業者
 が製造したもので、同じ記号と模様の茶碗は京都府舞鶴市の空山防空砲台跡で出土例があります。

おわりに

戦災により大きな被害を受けた今治市は、戦後みちがえるような復興をとげました。しかし、
 地中にはいまでも生々しい戦争の傷跡が残っています。今回紹介したような遺構や遺物から、本
 市が経験した悲惨な歴史を知るきっかけとなれば幸いです。

【参考文献】

- 今治市役所 昭和49(1974)年「新今治市誌」
- 今治市教育委員会 平成10(1998)「対富上河内遺跡」今治市埋蔵文化財調査報告書第39集
- 今治市教育委員会 平成22(2010)「高地薬谷1号墳・今治新都市開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集」今治市埋蔵文化財調査報告書第99集
- 今治市教育委員会 平成26(2014)「市内遺跡試掘確認調査報告書(平成24年度公共事業に伴う調査)」今治市埋蔵文化財調査報告書第123集
- 今治市教育委員会 平成31(2019)年「南日吉高塚遺跡・上堤原辰敷遺跡」平成27年度宅地造成工事に伴う発掘調査報告書・平成27年度農業道路(上地徳地寺線)設置工事に伴う発掘調査報告書」今治市埋蔵文化財調査報告書第147集
- 今治市の戦災を記録する会 平成21(2009)「今治市の戦災 あなたに伝えたい」
- 工藤洋三 平成27(2015)「日本の都市を焼き尽くせ! 都市焼夷空襲はどう計画され、どう実行されたか」
- 「戦災被災証書」全国主要都市戦災被災証書 国立公文書館デジタルアーカイブ
- 土城津町誌編纂委員会「土城津町誌 史料編」土城市土城口財産区 平成11(1999)年
- 沼崎隆「戦時下の「生産者別標示記号」(いわゆる統制番号リスト)を究明して」『東京考古』17 平成12(2000)年